



# 洋館の母娘

蜜肌のW報酬

天草白

挿絵／清兵衛

立ち読み版



Contents

目次

第1章	洋館の貴婦人	報酬は熟れた女体	4
第2章	秘密の花園	禁断の野外姦	51
第3章	深窓の令嬢	勝気な初体験	102
第4章	背徳の書斎	被虐の目覚め	143
第5章	開かずの間	妖美なW調教	188
第6章	洋館の母娘	蕩ける3P	242
エピソード	これからも母娘は僕の恋人		279

## 登場人物

Characters

### 田島 康平

(たじま こうへい)

大学一年生の童貞。教師になることを目指している純朴な青年。友人から紹介されて桐原家で住み込みの家庭教師を始める。

### 桐原 佳織

(きりはら かおり)

上品な容姿ながら、白い肌、豊かな乳房により妖艶な雰囲気纏う三十代後半の美女。年齢よりも若々しく見える社長夫人。夫が多忙のため身も心も寂しさを感じている。

### 桐原 沙良

(きりはら さら)

佳織の一人娘の高校三年生。高飛車で生意気な性格ながら根は素直。美しい艶に彩られた長い黒髪、切れ長の黒瞳の怜悧な美貌。モデル顔負けのスレンダーな肢体を持つ。



## 第1章 洋館の貴婦人 報酬は熟れた女体

「すみません、家庭教師の仕事で伺いました田島たじまと申しますが——」

インターホンで用件を伝えて金属製の門を開けてもらうと、椎の木が左右に並ぶ洒落た並木道が現れた。十メートル以上続く並木道の終点にはクラシクな煉瓦造りの洋館がそびえている。

「ここが桐原邸きりはらか。話には聞いていたけど、すごい家だな」

田島康平こうへいは目の前にそびえる巨大な館に圧倒された。ドラマや漫画でしかお目にかかれないような豪華な屋敷。文字通り『富豪の邸宅』だ。

「ようこそいらつしやいました、田島康平様。ご案内を仰せつかりました、橘京子たちばなきょうこと申します」

出迎えてくれたのは、これまたアニメにでも出てきそうなエプロンドレスの可愛らしい女性だった。ここの使用人らしい。

「田島様は住み込みでのお仕事と伺っております。これから一月ほど生活する場所です。おおまかな間取りは覚えてくださいね。さ、あたしについて来てください」

京子の案内で館の中を進んでいく。

——康平は都内の大学に通う一年生だ。

アルバイトを探していたところ、友人からこの家庭教師を紹介された。資産家の娘とは聞いていたが、実際に訪れた桐原家は想像を超えていた。

教える相手はこの一人娘である桐原沙良<sup>さら</sup>だ。

仕事をするに当たって、先方はいくつかの条件を出していた。

秋に行われる推薦入試の追いこみのため、可能な限り付きつきりで教えてほしいこと。そのため一ヶ月間、屋敷に住み込みで家庭教師をしてほしいこと。

当然、通常の家庭教師よりも拘束期間はかなり長くなる。ただし、アルバイト代は相場の四倍以上。

相手が素封家ということもあるが、これは破格の報酬である。桐原家は康平の自宅よりも大学への通学が便利な位置にあり、下宿気分での仕事を引き受けることにしたのだった。

この家に来ることになった経緯を思い起こしている間にも、案内のメイドはどんどん進んでいく。置いていかれないように、康平は彼女の後を追った。

行き先は応接間だ。館の女主人であり、生徒の母でもある桐原佳織<sup>かおり</sup>が康平に挨拶し

たいたのだという。

「これだけ広い家だと迷いそうです」

「あたしもたまに迷いますよ、ふふ」

落ち着きなく周囲を見回す康平に、京子が悪戯っぽく笑った。

無理もないと思った。使用人でさえ迷うことがある、というのも納得の広さなのだ。「敷地内は基本的に自由に散策していただいて構いません。もちろん、私室などに立ち入ることはご遠慮いただきますが……後は、中庭の一角に奥様のプライベートスペースがありますので、そこへは入らないでくださいね。それともう一つ、あの部屋も立ち入り禁止です」

京子が廊下の奥にある重厚な扉を指差す。

口調こそ丁寧だが、彼女の声には有無を言わせぬ迫力があつた。

「鍵を持つているのは旦那様だけで、奥様や沙良様でさえ立ち入れないとか。その旦那様も滅多にここへ帰りませんので、ちょっととした『開かずの間』ですね」

（開かずの間……かあ。ますますドラマっぽいな）

まるで自分が映画の中の世界に迷いこんでしまったように錯覚する。

「あたしは次の仕事がありますので行きますね。応接間は廊下を曲がった先の突き当

たりにありますので」

丁寧に一礼をして去っていく京子。

言われた通りに廊下を曲がると、五つの部屋が並んでいた。

「あれ、どの部屋だろう……?」

康平は戸惑いで立ち尽くした。てっきり部屋が一つだけだと思っていたのだ。もう少し詳しく聞いておけばよかった、と後悔する。

(しょうがない、もう一回聞か)

先ほどの場所まで戻るが、すでに彼女の姿はなかった。

「うーん、困ったなあ」

康平は頭をぼりぼりと掻きながら、軽いため息をついた。とはいえ、ここでいつまでも立ち尽くしているわけにはいかない。とりあえず五つの部屋の内、一番立派そうな扉を選んだ。

「し、失礼します」

おっかなびつくくりでドアを開いて部屋に入った。

「……えっ?」

視界に飛びこんできた光景に、康平の頭の中はフリーズした。

最初に認識したのは、抜けるような白——美しく滑らかな妙齡の女性の肌だ。

続いて艶めいた盛り上がりを見せる胸の双丘が、さらに見事に括れた腰のS字ラインが、そしてむっちりとした脂の乗った熟れた臀部が、次々と康平の視覚を淫らに刺激してくる。

目の前にいる女性は、ちょうど着替えている最中だったのだ。しかも下着まですべて脱ぎ去った状態の全裸だった。

年の頃は三十代の後半くらいだろうか、年齢に相応しい成熟を感じさせる気品のあつる美貌は眩いばかり。

アーモンド形をした切れ長の瞳も、どこまでも真っ直ぐに通った鼻梁も、鮮やかな朱に彩られた肉厚の唇も、すべてが芸術的なまでに整った美しさを備えている。

長い髪は艶めいた光沢を放ち、背中まで垂れていた。

その髪に櫛を入れているのは、先ほどとは別のメイドだ。どうやら主人であるこの女性の着付けを手伝っているらしい。

「まあ、奥様がお着替えなさっているんですよ！ すぐに出ていきなさい！」  
メイドが三白眼でにらんでいた。

「す、すみません、部屋をその……ま、間違えてしまった……みたいで……」

交際経験すらなく、女を知らない童貞の康平にとって、生身の女体を目にしたのは生まれて初めてのことだ。

テレビ画面を通して見るAVとはまったく違う、リアルな裸身だった。

三十代後半にもかかわらず、ほとんど弛みのない見事なプロポーションは官能的な妖美さと芸術品のような気品が同居し、康平は息をするのも忘れて彼女の肢体に魅入られていた。

「よいのですよ、麻美<sup>あさみ</sup>さん。間違えて入ってしまったようですし」

怒るメイドを、美貌の熟女が片手を上げて制した。

「今日からいらっしやるという家庭教師の方ですね。桐原沙良の母で、佳織と申します。初めまして」

さすがに人妻の余裕というべきか、男の前であられもない裸体を晒しながらもほとんど動じる様子がない。両腕で肌を隠して会釈を送るその仕草の一つ一つが、どこまでも優雅だった。

「お恥ずかしいものをお見せしてしまって。大変失礼いたしました」

怒り心頭で康平を糾弾してもおかしくないシチュエーションだというのに、佳織はむしろすまなさそうに頭を下げる。

「い、いえ、そんな！　すぐ綺麗で見とれてしまつて……あ、いえ、すみません」  
実際、役得としか言いようがない至福の情景だった。今も網膜には令夫人の美しく  
艶めいた肢体が焼きついている。心臓の鼓動は増すばかりで、若い血潮が海綿体に流  
入してズキンズキンと脈打っているのが分かった。

「あら、正直な方ね」

佳織は気品のある微笑を返し、それから意味ありげに視線を下げる。

釣られて視線を下げたところで、康平は頬が熱くなるのを感じた。

先ほど佳織の裸身を見た興奮で彼のシンボルはギンギンに充血し、今もズボンの股  
間部分は元氣よくテントを張っていたのだ。

康平が慌てて前屈みになると、佳織はまた可笑しそうに微笑んだ。

こうして、桐原家での住み込みアルバイトが始まった。

まるでドラマに出てくるような洋館での生活は、すべてが新鮮な驚きの連続だった。  
朝になると、初日にも康平を案内してくれたメイドの京子が起こしに来てくれる。

彼女は記憶力抜群で、康平の大学の講義スケジュールを一度聞いただけですべて暗  
記していた。

的確な時間に声をかけてくるし、朝食の時間も康平が理想的なリズムで生活と勉強に打ちこめるよう配慮してくれた。昼食は大学でとることが多いが、夕方になれば、高級レストランのフルコースさながらの料理でもてなされる。

（まるで王侯貴族にでもなった気分。すごい生活だよ、これって……）  
これだけ至れり尽くせりの上に、バイト代まで貰っていいのだろうか、と不安になるほどである。

おまけに洋館では美しい貴婦人然とした佳織の姿を毎日目にすることができるとだ。本来の主である桐原周蔵しゅうざうはほとんど家に帰ってくるのがなく、この館を実質的に切り盛りしているのは彼女だった。

使用人たちに的確に指示を出す凛とした様子も、穏やかで気品に満ちた態度も、そして一般庶民とは隔絶したきらびやかな美貌も——ほとんど一目惚れレベルで、康平はこの洋館の女主人に憧れの念を抱いていた。

至福ともいえる洋館での生活。だが——難問が一つだけあった。

「お前の説明は回りくどいわね。もう少し簡潔に教えられないの？」  
今日も彼女の態度は刃物のように鋭く、康平を斬りつけてきた。

美しい艶に彩られた黒髪は背中まで伸びるストレートロング。吊り上がり気味の柳眉が勝気な印象を強め、切れ長の黒瞳は意志の強そうな光を宿している。

伶俐な美貌はまさしく彫刻のよう。モデル顔負けのスレンダーな肢体にまとう学校指定の濃紺のブレザーが楚々とした雰囲気を醸し出している。

桐原沙良。

康平が家庭教師をする生徒であり、この屋敷の一人娘でもあった。

まさしく深窓の令嬢ともいべき沙良は、整った顔立ちを怒りで紅潮させ、年下らしからぬ態度で康平に顎をしゃくった。

「この間の家庭教師も教え方が下手すぎて一週間でクビにしたけど——その記録を更新するようなことだけはやめてね。こちらもお金を払っているんだから。対価に見合うだけの仕事はしてちょうだい」

長い黒髪をかき上げながら、苛立たしげに言い放つ。

その高慢な態度に、今までにも何人もの家庭教師が辞めていったという。康平に依頼してきた人間も前任者で、沙良に泣かされて辞めた口だとか。

（相変わらず高飛車だな、この子）

苛立ちを通り越して呆れながらも、康平は平静を装った。

「じゃあ、もう一度説明するよ……」

とにかく根気よく教えることだ。将来は教師を目指しているのだから、こういう生徒と接することもあるはずだ。そのための予行演習だと思えばいい。

「分かりづらいわ。やり直し」

懇切丁寧に解説したつもりだったが、沙良の態度はにべもない。

もつとも、彼女の理解力が低いわけではないはずだ。話によれば、もともと沙良の成績は抜群であり、学校では生徒会長を務めているとか。

ただ単に康平が気に食わなくてダメ出しをしているだけなのだろう。

沙良は、敬愛しているらしい母親を除き、他者にはとにかく攻撃的な少女だった。まるで見えない障壁を周囲に張り巡らせているようだ。しかも、その障壁は容赦なく他者を切り裂く刃でもあった。

(だけど、簡単に投げ出すのは嫌だ。とにかく我慢、我慢)

だが、その後も沙良の態度は軟化するどころか、日に日に険悪になっていく始末だった。

さすがに康平も限界を感じていた。

(僕、教師に向いてないのかなあ)

「どうですか、沙良の様子は」

佳織がいつも通りの穏やかな笑顔で問いかけた。

ここは彼女の私室だ。壁にかかった高名な画家の風景画を始めとする豪華な調度品は、美術館と見まがうほど。

授業が終わると進捗状況を報告することになっており、それが終われば後は自由時間だ。康平は提供された客室で読書などをしてくつろぐことが多い。

だが今は、自由時間を前にした解放感よりも憂鬱の方が強かった。

「……僕、自信がなくなってきました。もっと上手くやれると思ったんですけど」

今までは胸の内に留めていた弱音を実際に言葉に出したことで、気持ちの糸が切れるのを感じた。

「あの、申し訳ないんですけど、この仕事を辞めさせてもらえませんか？ このまま

続けても授業が成り立たないし」

「そんな……沙良の受験も近づいていますし、これ以上家庭教師が続けて辞めるのは困ります」

困惑した表情の令夫人に罪悪感が強くなる。憧れの人妻に少しでも報いるためにも、

できれば最後まで続けたい。だけど自分の力不足を痛感しているのも事実だ。

「よく考えた結果なんです。力になれずに申し訳ありません」

「……分かりました。どうしてもというなら止めません」

佳織が小さなため息をついた。どこか吹っ切れたような、あるいは何かを決意したような、不思議な表情を浮かべている。

「最後に少しお話がしたいので、私の部屋まで来ていただけますか」

案内されたのは佳織の寝室だった。

「あの、話ってなんでしょ？」

寝室で二人つきりという状況に、心臓が甘酸っぱく高鳴った。

初めて会ったときから、淡い憧れを抱いていた相手である。といっても、佳織は人妻だし、しかも上流階級の貴婦人だ。自分とは住む世界が違う。恋愛対象にしてはいけない女性だということは分かっていた。

（でも、ドキドキする気持ちを止められない）

鼻先をくすぐる花のような匂いは寝室のものか、それとも佳織から漂ってくるのか。ねっとりとした艶気を含んだ香しさが胸の鼓動を加速させた。

何よりも目の前にいる佳織の色香が、康平の気持ちをこの上なく高揚させた。

上品な容姿とは裏腹に、ゆつたりとしたドレスの胸元は大きく開き、深い谷間が鮮烈な妖艶さで視線を釘づけにする。豊かな盛り上がりはいかにも柔らかそうで肌理の細かい白い肌は艶めいた光沢を放っていた。

腰の括れは見事としか言いようがないし、薄いドレスの布地が張りついたヒップラインは妖美な丸みを描いて緩やかに揺れている。童貞の大学生にとって、見ているだけで勃起を避けられないほど魅惑的なプロポーションだ。

「先ほども申しました通り、受験の時期が近づいていますし、私としてはあなたに続けてもらいたいと思っています」

佳織が懇願の言葉を囁きながら、ゆつくりと顔を寄せてきた。

気品に満ちた美貌は穏やかな笑みをたたえ、十歳以上も年上だということを実感するだけの包容力と慈愛を漂わせる。切れ長の瞳は吸い込まれそうなほど深い光を宿して、康平を優しく見つめていた。

（本当に綺麗で、色っぽくて……まるでドラマとか絵画の中から飛び出してきたみたいだ。こんな魅力的な女の人が、この世にいるなんて）

二メートルほどの距離を置いて立ち話をしていたはずが、いつの間にか息が触れ合うほど近くにいた。甘い吐息が首筋に吹きかかる。背筋がゾクリと粟立った。

「か、佳織さん……?」

康平はかすれた声で相手の名前を呼ぶのが精一杯だった。異性とこれほど近い距離で話した経験はもちろん皆無だ。ドギマギして後ずさろうとしたところで、佳織がさらに顔を寄せてきた。

「んっ……」

半ば不意打ちで唇に柔らかな感触を押し当てられる。甘く蕩ける肉塊を口いっぱいを含んだような、得も言われぬ感触だった。

それが佳織の唇の感触だと気づいた瞬間、全身が赤熱化した。

(えっ!? 佳織さんにキスされてる……!)

美しい夫人との口づけは、康平にとつてのファーストキスだ。唇の純潔を憧れの人妻に奪われ、背徳の陶酔感が背筋を貫いた。

「取引、しませんか?」

唇を離れた佳織がふうつと悩ましげな吐息を漏らした。

康平の方は初めての口づけの余韻で呆然としたままだ。驚きと喜びが等分に混じり合って全身を駆け抜けている。四肢が震えて止まらない。

「家庭教師のアルバイト料に上乘せして、ある報酬を出します。その代わり、康平さ

んには沙良の家庭教師を続けてほしいんです」

突然、股間に柔らかな圧力が訪れた。ジーンズの硬い生地越しに絶妙の圧迫が肉棒に送りこまれてくる。ジンと痺れるような愉悅が腰の中心部に走り抜けた。

「な、何を……!？」

康平の股間にたおやかな手を伸ばし、手のひらで撫でさするようにしてまさぐっている令夫人を、驚きの目で見つめる。

ファーストキスをいきなり奪われたことに続き、今度はズボン越しに性器を弄ばれている——非現実的なシチュエーションの連発に思考がショートしていた。

同時に、ペニスに間断なく訪れる甘美な圧で理性が蕩けて霞む。

「か、佳織さん!! まさか、報酬って……ううっ」

佳織の指先がジッパーの辺りを上下に往復し、新たな快感が込み上げた。

「あら、随分と敏感ですね。やっぱり若いからですかしら？」

驚きを艶笑に変えた佳織が、なおも指先を躍らせる。

康平は制止も逃避も何もできずに、なすがままだ。

いやそもそも制止したいとも逃避したいとも思わなかった。ただただ甘美な感触を味わい続けたいという淡い願望だけが全身を浸している。

「女の口から皆まで言わせるつもりですか？」

熟女ならではの余裕を見せつけるように、白魚のごとき指がしなやかに動いてズボンの上から敏感な男根をさすった。硬い生地越しに肉棒の形を正確に感じ取り、気持ちがいいポイントを的確に押さえ、撫でる。

「うああ、いい……」

男のツボを知り尽くしたような絶妙な圧迫に充血が強まり、ズボンの中で康平の分身がムクムクと肥大化した。ジンと腰の芯が痺れる。少しずつ着実に増大する快楽で肉棒の芯が甘く脈打った。

「くあつ……ああ……ふああ」

熟妻の前では童貞の大学生など赤子同然だった。

佳織が指をしならせ、弾く。押しつけ、さする。そのたびに、下半身を快楽の稲妻が貫く。下肢を襲う甘美な脱力で膝から崩れ落ちそうになった。

（ああ、ズボン越しに触られてるだけでこんなに気持ちいいなんて——）

かすむ視界に佳織を捉えながら、脳髓が甘く痺れ、意識が次第に薄れていく。

「お嫌ではなさそうですね。承諾、と受け取らせていただきますわ」

最初は冗談かと思ったが、どうやら本気のようにだ。信じられない思いに康平は舞い

上がった。炎のような欲情がみぞおちの下を突き上げる。若い下半身が溶鉱炉のように煮えたぎる。

「か、佳織さん……」

上ずった声で、半ば無意識に相手の名前を呼ぶ。

下肢を間断なく襲う肉悦の連鎖で、今にも膝から崩れ落ちてしまいそうだった。

このまま佳織にいたぶられながら、彼女の足元に跪き、屈服したいという被虐の衝動が込み上げる。その一方で、この美しい令夫人を組み伏せ、すべてを征服したいという獐猛な嗜虐の欲望もまた感じていた。

不意に肉棒にヒヤリとした感触が吹きつけた。ぼうっとしている間に佳織が手早くファスナーを下ろし、ペニスを引っ張り出したのだ。外気に触れた男根は今にも湯気を立てそうなほど灼熱している。

「まあ、こんなに立派だなんて。奉仕のし甲斐がありますわね」

妖艶な笑みを深めた貴婦人が康平の足元に跪いた。

十八歳の肉棒は先ほどまでの刺激によって、すでにフル勃起状態だ。海绵体に血流が集中して極太のフランクフルトさながらに膨張した牡の器官を、朱色の唇が啣えこんだ。敏感な亀頭に温かな口腔粘膜の感触が訪れる。

(あの佳織さんが、僕のチンポを咥えてるなんて)

夢想したことは何度もあったが、いざ実現してみるとあまりにも非現実的な光景で、実感が湧かない。これは夢なのではないかと疑うほどのアンリアルな感覚。それを打ち消すように、佳織がゆつくりと顔を上下動させ始めた。

「なんて、太くて、熱い……ん、ちゅ……」

長い睫毛を伏せ、陶酔の様子で軽く目を閉じながら、リズムカルに口の中で肉棒を抜き差しする。じゅぽっ、じゅぽっ、と唾液の音が鳴り響き、肉棒を包む口腔の熱感とともに、生まれて初めてのフェラチオを受けている実感が強まった。

柔らかく、熱い口の粘膜が龟头と竿にびったりと吸いついてくる。

まるで佳織の口の中が康平のペニスに逃げて作られた性器のようだ。しかも、艶めかしく動く舌が先端の丸みに巻きついては、妖しく撫でて男根の性感を磨る。

たちまち広がった愉悦に連動して、鈴口から大量のカウパーが漏れ出した。

「んっ、塩辛くて、濃い味……若いだけあって、先走りの量も豊富ですね」

欲望の粘液を賞味しながら、佳織が嬉しげに感想を漏らす。上目遣いにこちらを見上げる美貌には、一回り年上の人妻の余裕が垣間見えた。

「うう、気持ちよすぎて……止まらないんです……」

ひっきりなしに足を、腰を、震わせ続ける。爪先にも膝にも太ももにも付け根にも、内部の神経が喪失したかのように力がまるで入らなかつた。心地よい浮遊感で腰全体が蕩けていく。

「もっと、気持ちよく……れるお、んんっ……なつて、康平さ……」

見下ろせば、頬を窄めて肉棒を強く吸引している佳織の顔があつた。

ほんのりと桜色に色づいた両頬は深く窪んだかと思えば、またふつくりと膨らみ、ペニスの吸いつけに意図的な強弱をつけているのが分かる。

（うわあつ、佳織さんの顔、エロすぎっ……!）

貴婦人を思わせる気品のある美貌とのギャップで、康平の欲情はうなぎのぼりだ。

その間もねつとりとした長い舌が間断なくくねつてはペニスに絡みつき、熱い肉の火照りと鮮烈な圧迫を同時に加えてくる。亀頭が鬱血しそうなほど強く絞められたかと思えば、竿を優しくくすぐられた。

「す、すご……い、気持ちよす、ぎ……ああつ……ふわぁ」

窄めた頬は自在に圧力を調整し、肉棒全体に甘美な肉悦が行き渡るよう、理想的な刺激を加えてくる。温かな口内粘膜に絞られ続ける生まれて初めての体験に、童貞の男根は蕩けてしまいそうだ。

もう何もかも忘れて、この美しい人妻の口の中いっぱい濃縮したスペルマをぶちまけたい――。

牡としての本能に支配され、射精に至りそうになったそのとき、

「あら、本番はこれから……ん、ちゅ……ですよ？」

口内での抜き差しを繰り返しながら、佳織がさらに目尻を細めた。

いつ射精してもおかしくないほど高まっているというのに、これが最高潮ではなく序の口に過ぎない――。

佳織の言葉に驚いた次の瞬間、令夫人は肉棒を口から吐き出した。

(えっ、もう終わり……?)

反射的にそんな考えに至り、落胆が込み上げる。

もちろん高嶺の花である貴婦人から口唇奉仕を受けられただけで、望外の幸せだ。

だけど、叶うならもつと味わっていたかった。佳織の唇と舌を、もつともつと楽しみたかった。

「そうがっかりなさらないで。本番はこれから、と先ほど申し上げたでしょう？」

ふふ、と上品に会釈すると、佳織はベルトを外してズボンと下着をまとめて引き摺り下ろしてしまう。

完全に下半身が露出したところで、ペニスを優しく挿んだ。ほっそりした五指が龟头や竿に巻きつき、軽く撫でる。

「えっ、何を……?」

童貞である康平には、次の展開がまったく読めない。

と、龟头が臍にくっつくくらい角度にまで、佳織が肉棒を持ち上げた。

いわゆる裏筋や睾丸を完全に晒した状態だ。その状態で佳織が顔を寄せてくる。

ねっとりと絡みつくような息が性器の付け根に吹きかかり、くすぐったさとも気持ちよさともつかない感覚で下半身が震えた。

「ううっ」

鈴口をピンク色の舌でこじられる。そこから龟头の丸みに沿って降りていくと、敏感な先端部全体にゾクゾクと震えるような愉悦が走り抜けた。

佳織の舌はなおも止まらず、ぴちゃり、と音を立てながら、真っ直ぐに伸びる裏筋を辿っていく。そんな場所にも性感が存在したのかと驚かされつつ、新たな愉悦がペニスの芯にまで染み渡った。

熟妻の舌先は付け根まで到達しても、まだ止まらない。次は何をされるのだろうかという淫らな期待感で背筋がゾクゾクと痺れた。

「くああ、そ、そんなところまで……」

今度は寧丸の皺を一本一本伸ばすような丁寧さで、右、左と順番に口づけし、舌で舐め、しゃぶっていく。新鮮な精液がたつぷりと溜まった精巢にまでじわじわと妖しい痺れが浸透する。

一方で佳織の手コキも次第に速度を増していった。細く長い指先がたおやかに踊っては亀頭や竿に絡みついてくる。肉棒の先端を覆うように手のひらで包まれた。優しく撫でられ、妖美な痺れが亀頭を浸す。指の腹で竿を撫でられ、流れ込んだ血潮が熱く脈を打った。

（こんなに気持ちがいいの、初めてだ……！ もっと……もっと、ずっと味わっていたい）

心の中で至福のため息を漏らす。

自慰では到底辿り着けない快樂の領域にやすやすと押し上げてくれる佳織の技巧に感嘆と陶醉を覚えた。まさしく性器すべてを口と舌と指で満遍なく愛撫されている手コキとフェラチオの二重奏だ。

「か、佳織さん、僕もうっ……」

自分でも情けなくなるほどあつという間に、康平は我慢の限界を超えた。

頭の芯が白熱して理性も思考も吹き飛ぶような感覚が走る。

憧れの熟妻を見下ろしながら、夢中で腰を震わせた。

「では、そろそろ達して……じゅぽ、ん、ふお……くださ……んんっ」

ほぼ同時に佳織がじゅるうつと唾液の音を立てて、一際強くペニスを吸い立てる。

その吸引が止めとなり、康平の射精感の引き金を引いた。

「うああ、駄目、だああ……」

最初に訪れたのは、精巢が燃え上がるような爆発感。次いで大量のザーメンが輸精管を駆け上がり、鮮烈な痺れを伴いながらペニスの芯を通り抜ける。

そのまま止める暇もなく、鈴口から大量の精が迸った。

温かな口の中いっぱい熱い樹液をぶちまける。

貴婦人の口内に己の子種を撒き散らす爽快感。

「ぐおお……おおっ」

康平は日頃のおとなしい態度に似合わない獐猛な雄たけびとともに、本能のまま肉棒を脈動させていた。

憧れの令夫人を相手に、生まれて初めての口内射精――。

「ふわああ、イ……クッ……」

最初から最後まで熟妻にペースを握られつ放しの人生初フェラチオの終焉は、悲鳴混じりのアクメ声だった。

経験豊富な令夫人に完膚なきまでに性で打ちのめされる敗北感は、甘美な被虐感となつて康平の下半身を性悦で蕩かせた。

「ふう、すごく濃いんですね、康平さんの」

口の端から白濁混じりの唾液を垂らす佳織は、普段の上品さが嘘のような淫蕩さを醸し出していた。

今までの佳織が貴婦人だとすれば、今の彼女はまさしく高級娼婦だ。

むせ返るような『牝』の気配が康平の『牡』をこの上なく刺激する。

「まだまだ元気でですね。続けてみましょうか？」

「えっ、続けてって……まさか」

佳織が言わんとすることを想像し、全身がカッと燃え上がった。

「これくらいの報酬では満足いただけようですから、うふふ。それとも康平さんは、私のような年上女はご不満かしら？」

これほど美しい人妻にフェラチオ奉仕してもらっただけでも夢のような出来事だ。なのに彼女はさらに性奉仕をエスカレートさせようとしている。

フェラチオ以上の奉仕——それはつまり、童貞の康平にとって完全に未知の行為であり、憧れの行為でもあった。

「不満だなんて……そんな、こと……」

ごくりと喉が鳴った。

自然と佳織の身体に視線を向け、食い入るように這わせた。

豪華なドレスは身体のラインがはつきりと浮き出るデザインだ。

豊かに盛り上がった双丘も、芸術品のように括れた腰も、熟れきって張り出した臀部も——女体の神秘のすべてが、ドレスを透かして見て取れる。

といつても、童貞の康平にとって性行為まで踏みきる勇氣を持つのは至難のことだった。

上手くできるだろうかという不安はあるし、羞恥もある。

ちゃんと最後までできなかつたら、と男の体面も考えてしまう。

だが、佳織とセックスできるかもしれない千載一遇のチャンスを逃したくない。欲情と正常な思考の狭間で揺れ、康平はその場に立ち尽くした。

「沙良の性格のキツさは筋金入りなんです。これくらい報酬ではあなたを繋ぎとめられないかもしれません。これだけでも家庭教師を降板されてしまったら、私にな

んのために人妻の禁忌を破ってまで奉仕したか分かりませんわ」

佳織が切れ長の瞳をすうつと細めた。

穏やかな貴婦人の顔ではない。それはすでに獲物を搦め捕ろうとする狩人のような鋭さを持っていた。

「やるなら徹底的に——あなたを蕩かせてあげます。何があっても家庭教師を続けてもらえるように。いいですね、康平さん」

「か、佳織さん……?」

「仕事の対価としてアルバイト料金の他に、私の肉体もお支払いします。そして沙良の家庭教師を辞めない限り、これからも私の身体を味わい続けることができます——この条件で如何ですか?」

佳織の瞳が真っ直ぐに康平を射貫く。

心臓が異様に鼓動を打っていた。ここで首肯すれば、夢にまで見た初体験を、それも極上の令夫人を相手に為すことができる。

一歩だけ——そう。ほんの一歩だけ、踏み出す勇気があれば。

「それとも……私の身体では報酬として物足りないですかしら?」

「そ、そんなことはありませんっ」

康平は弾かれたように立ち上がり、叫んだ。  
物足りないなどあり得ない。

むしろ彼女の身体を抱けるなら、どんな困難にだって立ち向かえるだろう。

「では——これは契約です。いいですね？」

洋館の女主人は厳かに宣言した。

家庭教師を引き受けたときの、書面上の契約とはまったく違う。

熟れた女体を用いた、妖しい契約。

淫靡な予感で背筋が甘痒く痙攣した。

その契約と引き換えに、康平はこれから極上の女体を味わうことができるのだ。しかも最高の童貞喪失を伴って。

「は、はい」

興奮のあまり声が上がらず、その一言を発するのがやっとだった。

しなやかな指先がワイシャツ越しに、胸板に触れた。

「あ……」

意外に強い力でそのまま傍にあるベッドに押し倒される。

佳織にのしかかられ、押し倒された格好だ。

全身に感じる女体の心地よい重み。柔らかさと、まろやかさ。

そのいずれもが、恋愛経験すらない康平にとって初めて感じるものだった。

胸板に触れている佳織の双丘から、薄いドレスの生地を通して強いビートを刻んだ心音が聞こえてくる。

（佳織さんも緊張してる……？ それとも——）

ひそかに、興奮しているのだろうか。

「ふふ、さつきよりも硬くなってますね」

佳織の手が康平の股間をふたたびまさぐった。

先ほど触られたときに、すでに瑞々しい海綿体は最大限に充血している。

柔らかな女体にのしかかられ、抱きすくめられて、その興奮はさらに増大し、限界を超えてはち切れんばかりに肥大化した若い肉茎はフル勃起状態で、とっくの昔に臨戦態勢に入っていた。

「まあ、熱い……私の中に、入りたいですか？」

佳織が嬉しそうに目を細めた。

ドレスのスカートをまくり、見せつけるようにショーツを脱ぎ去った。薄くひらめくスカートの向こうに、黒いものが見えた。

あれは、女の茂みだろうか。それともただの陰影なのか。

「は、はい……！」

魅惑の女穴を求めて若茎は垂直にそそり立っている。

佳織が妖しく腰をくねらせるたびに亀頭が滑らかな太ももを擦り、熱くぬめる何かに当たった。

（これって、佳織さんのアソコ？ 直接、触れてる——）

スカートに阻まれてはつきり見えないが、肉棒の切っ先は熟夫人のクレヴァスに触れているようだった。

もちろん、そこに触れるのも生まれて初めてのことだ。

初体験の連続で、純朴な童貞青年の心臓は破裂寸前だった。

「では約束してください。絶対に家庭教師を辞めないと。沙良の受験が終わるまで責任を持って続けてくれると」

「約束、しますっ」

康平は一も二もなくうなずいた。

これほどの女体を前にして肯定以外の返事などあり得ない。

「分かりました。あなたの言葉を信じますよ。これは——約束の証です」

甘い吐息混じりに嘸きながら、佳織がゆつくりと腰を浮かせた。

鉄のように硬化したペニスを両手で掴み、肉厚の秘唇にあてがうように位置を調節すると、そのまま一気に腰を下ろしてきた。

「うああっ」

佳織の体重がかかるにつれて、二枚の花弁を押し開きながらペニスの先端が膣孔の内部へと飲みこまれていく。

とうとう味わった美しい女主人の秘密の肉洞。

生まれて初めて体感する膣壁は火傷しそうなほど熱く、蕩けるように柔らかく、無数の贅肉が男根の周囲に絡みついてくる。

「おお、おうっ……!!」

膣圧による締めつけと挿入による甘い摩擦感を同時に感じながら、康平はほとんど無意識に唸り声を上げていた。

想像していたのと実際に体験するのは大違いだった。自慰の快感とは文字通り次元が違う。下半身全体が溶けてしまいそうだ。

ずんつ、と重量感のある二つの尻たぶが康平の腰に降りた。

「あっ……」

腰元に視線を送り、思わず声が漏れた。

垂直にそそり立っていた肉の茎はその根元までが佳織の内部に飲みこまれていた。絡み合う互いの陰毛の狭間で、薄赤色の秘唇の狭間へ突き刺さるペニスの付け根がわずかに見える。

異性の身体の一部と繋がり、性器の粘膜同士が熱く触れ合っている——不思議な感慨を覚える実感は、すぐに童貞喪失の感動と興奮へと転化する。

「まあ、その様子だと初めてだったみたいですね？ どうですか、女の中を味わった感想は」

見上げると、わずかに頬を赤らめて上気させた佳織の美貌があった。

目尻が下がり、トロンと潤んだ瞳で康平を見下ろしている。

「は、はい、女の人とするの……初めて……くう、うううっ……す、すごく気持ちいい、ですう……うあっ」

膣内が大きく蠕動し、内部に咥えこんでいるペニスを嬖肉全体でまさぐってきた。性感が燃え上がるような愉悦とともに、腰の芯が甘く疼く。

まだ本格的なピストンには程遠い。膣に肉棒を挿入しただけである。

にもかかわらず、気を抜けば達してしまいそうなほどの肉悦が腰の奥から背筋を駆

け上がり、脳髓までを蕩かせている。

「せっかくの初体験ですもの。素敵な思い出にして差し上げますわ。さあ、動きま  
よ、康平さん」

佳織が艶然と微笑みながら宣言した。

「えっ、ま、待ってください。まだ……」

今動かれたら、それだけで射精してしまいそうだ。

だが佳織は口の端を吊り上げ、笑みを深くしたのみ。

康平の懇願を却下して腰をゆっくりと持ち上げた。

「ふっ……う、んっ」

短い呼吸を吐き出しながら、豊満な女体が康平の腰の上で躍動する。

こんもりと盛り上がった胸の双丘はドレスの布地越しにもはつきりと確認でき、しかも騎乗位の腰遣いに合わせて驚くほどダイナミックに揺れて、視覚的な興奮を訴えかける。

「ああ、久しぶりですわ、この感触……太くて、硬い」

佳織は長い髪をかき上げながら喘いだ。

気品のある美貌が艶めいた悦びに彩られる。

興奮を滲ませた短い吐息を間断なく漏らしつつ、グラマラスな腰つきは上下運動に旋回運動を加えた。

「ぐううっ、き、気持ち、いい……うああ」

康平はほとんどなすがままで至福のうめき声を漏らした。

佳織の熟練した腰遣いに連動し、抜き差しとの角度が変わるたび、縦横から鮮烈な摩擦感をペニスに浴びる。

濡れた粘膜で肉棒の先端から根元までを甘痒く擦られた。ジンジンと痺れる肉悦が肉棒に染み入る。佳織の尻が重量感を伴って着地すると、肉棒から腰の芯にまで肉悦の電流が響き渡った。

（うわあ、どんどん気持ちよくなる……これが、本物のセックス——）

すかさず佳織がもう一度腰を持ち上げ、今度は先ほどとは逆方向の摩擦感がペニスの付け根から亀頭までを駆け抜ける。

膣から外れそうなほど腰を持ち上げたところで、もう一度令夫人が腰を落とした。

「ううっ、だ、駄目だあ……！」

康平に耐えられたのは、そこまだった。

佳織が彼の腰の上に尻をつけるのとほぼ同時に、高まった射精感のままに、童貞を



失ったばかりの男子学生はアクメの声を漏らした。

「出るっ、出ちゃうっ……！」

ほとんど悲鳴のような声とともに、無意識に腰を突き上げる。

子宮と亀頭がぴったり密着する感触があつた。

精巢から迫り上がった大量のザーメンが、津波のような勢いで佳織の膣深くにぶちまけられる。十代ならではの濃厚で濃縮された子種液だ。牡の本能のままに、美しい牝を孕ませようと子宮に向かって殺到する。

「熱い……ああ、こんなに出る、なんて……ふあぁっ……」

大量射精を膣奥で受け止めて、佳織はうっとりと上気した顔で喘いだ。

小鼻を震わせ、軽く開いた口から漏らす吐息は肉悦の色に染まっている。

康平のがむしやらな腰遣いと若い樹液を胎内でモロに浴びせられて、軽く絶頂まで達したのかもしれない。

より艶気を増した人妻を見上げながら、康平は最後の一滴までぬかるんだ肉壺の内部に己の精をぶちまけた。

ふうっ、と息をついた佳織が、満足げに康平を見下ろす。

「うふふ。お若いんですね、康平さん。子宮が溺れそうなくらい大量に注ぎ込まれて

しまいましたわ」

火照った秘孔が満足げにひくつきながら、肉棒に襷を絡ませてくる。

ペニスが膣内で溶けてしまったような心地よい余韻があった。まさしく、精を余さず搾り取られたという感覚だ。

「はあ、はあ、はあ……」

目がくらむような射精の快感で、康平は息も絶え絶えだった。

とても返答する余裕などない。

自慰とは比べ物にならないほど圧倒的な放出感と解放感で、腰が砕けてしまったようにまったく力が入らなかった。単に精液を排出したのではなく、女性の膣と子宮に一滴も余さず進らせ、種付けしたのだという生殖の実感だった。

「これで童貞卒業ですね。おめでとうございます、康平さん」

佳織は上体を倒して康平の胸板にしなだれかかった。サラサラのドレス生地を通して上気した肌の熱が伝わってくる。

令夫人は甘い息を吐き出して顔を寄せると、人生初セックスを労うように唇を触れ合させた。

「ん……」

甘い感触に康平は鼻声で喘ぐ。

恋人同士の後戯代わりのキスのようでもあり、ペットに与えるご褒美のようでもある、蕩けるような口づけだった。

甘美な接吻に浸っていると、若いスペルマを美味しそうに飲みこんだ熟膣が歓喜の蠕動を繰り返しながら、なおも内部に突き刺さった肉杭を食い締めてきた。

射精直後で痺れるような快感に包まれているペニスに、断続的な刺激を受けて、たちまちフル勃起状態を取り戻した。

力強く脈動しながら、ごつつ、と硬い亀頭で子宮を突き上げる。

「んっ」

佳織は唇を離し、上半身を軽くくゆらせた。驚いたように形の良い眉をわずかに上げる。

「まあ……さっき出したばかりで、まだできるのですか？」

「すみません……あんまり気持ちよくて、つい」

康平は気恥ずかしさを感じてしまう。

呆れられただろうか？ それとも軽蔑されただろうか？

「あら、気に病む必要はありませんよ。あなたが満足するまで、何度でも続けましょ

うか？」

佳織の笑顔は、こんな時でも上品さを失わない。

妖艶でありながら、まるで王侯貴族のような気品を併せ持ち、それでいて淫らに康平を誘ってくる。

「い、いいんですか？」

思わず息を呑んだ。これで終わりではなかったのだ。ヌメヌメした膣肉に啞えこまれたままの肉棒が期待感でドクンと跳ねた。

「あんっ、また動きましたね」

胎内に力強い脈動が伝わったのか、佳織は嬉しげに目を細めた。

「取引ですもの。家庭教師を続けてもらう代わりに、私の身体を好きに使ってください。結構ですよ。康平さんの気が済むまで、何度でも私の中に注ぎ込んで——」

胸板に手を突いて上体を起こすと、むっちりとした脂の乗った下腹部を持ち上げる。

結合を解いて中腰の姿勢になると、見せつけるように長いスカートをめくる。ぱっくりと開いた膣孔の奥に赤い肉洞が広がっているのが見えた。

複雑に重なった襞は注ぎ込まれた精液を膣奥へ、そして子宮へと運ぼうと細かな蠕動を繰り返している。収まりきらなかった分は逆流し、白濁色の糸を引きつつ、垂れ

落ちてきた。

自分がこの美しい婦人の中に思うさま射精したのだという証を目の当たりにし、新たな興奮が下腹を突き上げる。ギンギンに勃起した肉棒は、もう一度あの極上の膣を味わいたいと内部から弾けそうなほどだ。

臨戦態勢のペニスを見下ろし、佳織は淫蕩に微笑んだ。

「ますます元気になって……うふふ。今度は康平さんから腰を振ってみますか？」

「僕……から？」

キョトンとした康平に対し、佳織は微笑みを浮かべたまま、四つん這いの姿勢を取る。スカートをからげて裸の尻を曝け出した。

眼前で揺れる豊かな臀丘に、康平の視線は釘づけになった。

盛り上がった二つの尻肉は美しい球面を描き、その接地面に魅惑的な谷間を形成している。谷間に目を凝らせば、朱鷺色をした可愛らしいアナルや黒々とした陰毛に彩られた淫靡な秘園が丸見えだ。

令夫人の秘密の場所がすべて曝け出されていて、康平は呼吸をするのも忘れて見とれていた。

「じっくり見るのも初めてですよね？　ふふ、随分と熱心に観察なさって」

声に羞恥を滲ませつつも、佳織の態度には人妻ならではの余裕が感じられた。

一方の康平は魅惑の園に視線を惹きつけられつつ放しだ。

「さあ、どうぞお召し上がりください」

むっちりとした肉づきのよい尻丘を挑発するように振りながら、佳織が背中越しに振り向いた。

しなやかな指先をクレヴァースに沿えて人差し指と中指で肉の花弁を自ら割り開いてみせる。

「うわあ……」

ほとんど無意識に嘆声が出た。

ぱっくりと開いた膣洞の奥には鮮やかな赤色をした肉層が垣間見える。

先ほどたつぷりと注ぎ込んだ白濁の樹液が糸を引いて垂れ落ち、周囲にプンと牡臭い匂いを振りまいていた。

「じ、じゃあ、いきます……」

康平は誘われるがままに腰を近づけ、体液で滑って淫靡な光沢を放つ剛棒の先端部をぬめった膣孔にあてがった。

ぐちゅ、と音がして亀頭の先が柔らかかなラヴィアを丸く押し広げる。

そのまま吸いついてくる二枚の花弁を内部に巻き込みながら、肉棒の先端部が佳織の中に埋まった。

まだ先端が入っただけだというのに、熱い膣肉の締めつけで、どぴゅつと我慢汁が飛び出してしまふ。康平は夢中で腰を押し出した。ほとんど力を入れなくても、インサートは容易だった。

ずつ……ずつ……。蠕動する腭肉に吸い込まれるようにして、怒張器官が胎内に飲みこまれていく。

雁首から竿の中腹辺りまでが牝穴の内部に埋没し、それにつれて締めつけの快感はますます高まった。

「うああっ……」

康平は至福の喘ぎを漏らした。佳織が主導しての童貞喪失時とは違い、今度は自分から腰を動かしてのインサートだ。

挿入するだけで、ふたたび射精まで達してしまいそうなほど気持ちがいい。

それに加え、視覚的な興奮も先ほど以上だった。

熱くぬめぬめとした肉の中に己のシンボルが埋まっていくビジュアルが、女体を征服しているという実感を弥が上にも与えてくれる。

「ん、ふあぁっ……」

ズブリと最奥まで差しこむと、ドレスに包まれた豊満な肢体が弓なりに仰け反った。振り向いた佳織の顔は薔薇色に染まり、目尻がトロンと垂れている。気品のある熟妻がその表情に浮かべているのは明らかな性的興奮だった。

「おぉっ」

康平は短く吠えて、抜き差しを開始した。

若さに任せて、腰全体をパワフルに叩きつける。

飢えたような腰遣いは教わったものではない。経験によるものでもない。

牡としての本能が為し得る律動だった。

「はぁっ、あんっ、すごいですわ……まるで、鋼鉄の棒が……あうんっ、私の中……出入りして……みたいで……はぁぁっ」

むっちりした尻を振りたくり、自分より一回りも年下の男のピストンをすべて受け止める佳織。

「くううっ、僕もすぐ……吸い込まれ……ふあぁっ、搾り取られ、そ……」

膣肉の蠕動はさらに強まり、康平のペニスの先端から付け根まで幾重にも絡みついてくる。

濡れた感触が吸盤のように吸いつき、肉棒の性感を燃え上がらせる。

康平は飢えたようにピストンを続けた。

腰の動きが止まらない。突けば突くほど肉悦が増大し、下半身が溶鉱炉に放りこまれたように官能の炎で燃えさかった。

蕩ける。蕩けてしまう。

これが本物のセックスなんだ、と康平は感動と興奮に包まれながら、ストロークの速度を最大限に引き上げた。

こなれた肉壺を己の分身で思う存分かき回す。

その動きに合わせて佳織の肉褌がまとわりつき、康平の肉茎を搾り取る。

「ふあああつ、ああ、それ……イイツ！ イイですわ！ その調子……もつと。もつと突いてください、ませえつ……！」

佳織の表情はますます赤らみ、目尻の辺りが涙で潤む。

さらに興奮を高ぶらせているらしく、開いた口の端から涎が垂れ落ちていた。髪を振り乱し、汗の珠が飛び散る。

貴婦人然とした美貌が牝の顔へと変貌する。

（僕の腰遣いが佳織さんを乱れさせてるんだ）

高嶺の花そのものの貴婦人を、自分のような一介の男子学生が貫き、屈服させようとしている――。

下剋上の愉悅が脳髓を蕩かせ、牡としての征服感が肉棒を燃え上がらせる。

「私も気を遣りそう、ですわ……んっ、駄目、イクウ！」

くなくなど艶めかしい肢体を痙攣させながら、佳織がアクメ声を上げた。

雄大な尻肉が小刻みに震え、膣肉はざわめきながら、さらに強くペニスを締め上げてくる。

先ほどの騎乗位のとときよりもずっと強烈で鮮烈な快感の反応だった。

(やったぞ、僕とのエッチで佳織さんが気持ちよくなってくれた！)

性経験豊かな熟妻を、童貞を失ったばかりの自分が肉棒一本でヨガらせ、絶頂にまで導いた達成感で胸が熱くなる。

「来てっ、もう来てえっ……!!」

オルガスムスに浸りながら、佳織がなおも尻を振りたくる。

膣圧が高まり、肉棒を包む牝壺が最大級の肉悦を送りこんできた。

「うああっ、だ、駄目だあっ……!!」

佳織をイカせた喜びに浸ったのも束の間、ほとんど間髪容れずに康平も絶頂まで達

してしまふ。

尾てい骨や腰骨から脳髓にまで突き抜ける快樂の稲妻を感じながら、全身を強く震わせた。

肥大化した肉塊の先端から、残ったすべてのスペルマが怒涛の勢いで迸り出る。

一度目の膣内射精に勝るとも劣らぬ、おびただしい量の放出だ。

射精時に特有の圧倒的な解放感に加え、女性の中に己の欲望のすべてを放出し、受け入れてもらっている多幸感が加わり、全身が蕩けそうだった。

今度こそ正真正銘最後の一滴まで令夫人の内部に注ぎ込み、康平は深い息をついてペニスを抜いた。

「すごい……これが、本物のセックス……」

牡と牝の体液で濡れそぼった肉棒は力を失ってだらりと垂れ下がっている。

先端からこぼれる精液の残滓がシートに滴り、プンと牡臭い匂いを振りまいた。

その匂いで、あらためて自分はこの美しい人妻を交わったのだと実感する。

最高の初体験だった。

「ふう、取引と言いなながら夢中になってしまいましたわ」

佳織がうっとりとした顔で背中越しに振り返った。

高々と掲げられたままの豊尻は鮮やかな薔薇色に紅潮している。

尻の谷間から覗く秘孔は、ラヴィアもその奥の肉層も真っ赤に充血し、ムアツと牝の匂いを振りまく。二度にわたって注ぎ込まれた白濁の樹液が、膣の縁や黒い陰毛を伝い、後から後からこぼれ落ちていた。

「あ、あの、僕……」

甘美な情交の余韻に浸り、康平は夢見るような気持ちで佳織を見つめる。

美しい人妻もまた、うっとりとした顔で見つめ返し、

「では沙良の家庭教師を引き続きお願いしますね」

だが、すぐにその表情は怜悯な女主人のそれへと変わる。

まるで一瞬前までの情事など、なんとも思っていないかのような——冷然かつ透徹な貴婦人の顔だった。

「きちんとお勤めを果たしてくれる限り、私も報酬を払い続けますわ。この身体すべてで」

言いながら、指先で康平のペニスをそつと撫でる。

微妙な圧力を受け、若い肉棒はまたもやムクムクと起き上がり始めた。

「まあ、まだこんなに……」

さすがに目を見張った様子の佳織。

「すみません、つい」

二度も胎内で果てたというのに、まだ勃起を続けていることに、さすがに気恥ずかしさを覚える。

「謝ることなんてありませんよ。男性としては、むしろ誇るべきことですわ。女性を悦ばせる能力に長けているという証ですもの」

佳織がふたたび微笑み、男としての自信を心地よくくすぐってくれた。

「まだ収まりがつかないようですね。何度でも味わっていいんですよ、あなたの受け取るべき報酬ですから——」

微笑みを濃くした佳織に、康平は息を荒らげながら挑みかかっていった。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**